



松坂屋名古屋店の歴史(百貨店時代)

平成27年5月30日(土)→8月25日(火)

明治43(1910)年、業態変革をめざした「いとう呉服店」は、株式会社に改組し、名古屋の新時代のメインストリート・広小路の栄町角に、わが国で2番目、名古屋で初の百貨店を開業した。以後、いとう呉服店は、商品面のみならず、文化面においても多目的ホールの設置、それにとまなう少年音楽隊(現東京フィルハーモニー交響楽団)の創設など、斬新な諸施策を次々と打ち出し、消費の殿堂としての百貨店の原型をつくっていった。開業から15年後の大正14(1925)年、手狭になった栄町を離れ、南大津町(現在地)に6階建ての新店舗を建築、移転した。同時に、他社に先駆けて商号から呉服店を外し、全店を「松坂屋」に統一した。

●栄町角に百貨店を開業

名古屋の新しいメインストリート広小路と大津通りが交差する栄町角に市役所庁舎があった。それが明治40(1907)年10月に全焼した。百貨店建設を思い立った伊藤家^{すけたみ}15代祐民はこの地を購入し、「名古屋開府300年」にあたる明治43年2月1日に「株式会社いとう呉服店」を創立(資本金50万円)。同年3月1日、名古屋初のデパートメントストア「いとう呉服店」^{ていじ}を開業した。鈴木禎次設計の3階建てのルネサンス様式の店舗は、「白亜の洋館、美しく飾ったショーウインドー、店内には流行の品々を集めたいとう呉服店」「行灯より電灯に変わった以上の進歩」と各紙に絶賛され、名古屋市民に熱狂的に迎えられた。



栄町のいとう呉服店



いとう呉服店
ポスター

◆名古屋の都市景観を創った建築家

明治39(1906)年6月、留学先の西欧から帰国した鈴木禎次(1870-1941)は、前年9月に開校した名古屋高等工業学校(名古屋工業大学の前身)に着任、教授・学科長として建築科の基礎を築いた。建築教育のかたわら、幅広く設計活動を行い、東海地方の建築の発展に大きく貢献した。松坂屋との関係がとりわけ深く、名古屋店(明治後期・大正後期)、上野店(大正初期・昭和初期)、大阪店の店舗などを設計した。夏目漱石の義弟としても知られる。



鈴木禎次

◆「芸どころ名古屋」を支えた多目的ホール

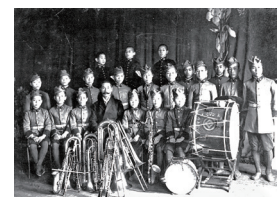
「演舞室は西角にあり、観覧席51坪、舞台26坪」「舞台を3階に設け、歌舞音曲、演芸、講演、或は集会等の用に供す」「何人にも貸与するよし」と新聞に書きたてられた3階の多目的ホール(演舞室)は、百貨店初のみならず、名古屋でも初の施設であった。昭和5(1930)年に鶴舞公園に公会堂ができるまでの20年間、「芸どころ名古屋」の唯一の発表の場でもあった。いとう呉服店(松坂屋)でも、美術展や余興など、各種の催し物を積極的に行い、文化的機能の拡充をはかった。



多目的ホール

◆東フィルへと発展した「いとう呉服店少年音楽隊」

明治44(1911)年、いとう呉服店は、多目的ホールで行うイベントを盛り上げるため、「いとう呉服店少年音楽隊」を創設した。最初は管楽器だけのブラスバンドで開始したが、2年後に弦楽器も取り入れオーケストラになった。その後、全国選抜中等学校野球大会(現在のセンバツ)の開会式の演奏をつとめるなど活躍の場を広げていった。昭和13(1938)年、名称を中央交響楽団に改め、活動拠点を東京に移した。昭和23年、東京フィルハーモニー交響楽団と改称し、わが国を代表する交響楽団へと発展した。



いとう呉服店少年音楽隊





●南大津町に移転、「松坂屋」となる

大正14(1925)年5月、いとう呉服店は会社創立15周年を機に、商号を「松坂屋」へ統一。名実ともに呉服店から百貨店へと変貌を遂げた。同時に、手狭になった栄町角から南大津町(現在地)へ新築移転した。総面積20,000㎡、地上6階、地下2階の新店舗は、名古屋城と比肩する高層建築物といわれた。土足入場(下足の廃止)を打ち出したのもこのときであった。昭和3(1928)年には、秋に鶴舞公園で開催される「御大礼奉祝名古屋博覧会」(9月15日~11月30日)に合わせて、本館北側に2階建ての北館(1,315㎡)を増築し、2階を催事場とした。



南大津町(現在地)の松坂屋



「新店舗案内」のパンフレット

●名古屋店を増築

南大津町(現在地)移転時の大正14(1925)年に約77万人であった名古屋市の人口が、昭和9(1934)年には100万人を超えた。松坂屋は、都市の発展につれて小規模な増築を重ねてきたが、いよいよ木造2階建ての北館を取り壊して大拡張工事を行うことになった。昭和12(1937)年3月、旧面積の6割増、総面積33,000㎡の増改築が完成し、売場のみならず店内の諸施設も飛躍的に充実した。デパ地下の先駆けとなった日本初の「東西名物街」がオープンしたのもこのときである。3月15日からは名古屋港で開催する「名古屋汎太平洋平和博覧会」(~5月31日)に協賛して「新日本文化博覧会」を繰り広げた。



増築の名古屋店



「増築完成」のポスター

●標語「生活と文化を結ぶマツザカヤ」を制定

昭和20(1945)年3月19日の空襲で全焼した名古屋店は、終戦後ただちに店舗の復旧工事に着手。そして昭和24年秋、6階の北半分と7階ホール、中8階を除く地下2階から屋上までが完成した。同年、この改装した店舗の6階で「名古屋市制60周年記念展」(10月1日~9日)、5階で「名古屋城障壁画展」を開催。屋上には名古屋城の模型を展示した。昭和23年5月、日本中が焦土であったなか、松坂屋のイメージを象徴する宣伝標語を公募。「生活と文化を結ぶマツザカヤ」を選定した。昭和28年には全館の改装工事が終了、外装も一新した。



昭和28年の名古屋店



標語入り広告

●リビンザ(北館)を増築

名古屋市の発展に合わせて増築を重ねていった名古屋店は、昭和40年代になると更に大型化していった。昭和46(1971)年11月、1年10カ月の期間を費やして、久屋通りに面した東南部分の増築が完成した。地下2階、地上10階建ての大型百貨店の誕生であった。本館増築からちょうど1年後の昭和47年11月、ハウジング関連の売場を集約した住まいの殿堂・北館リビンザがオープンした。こうして名古屋店は、中部地区で初めて売場面積50,000㎡を越す大型百貨店となった。



増築の本館と新築の北館(リビンザ)



リビンザ開店の広告

●南館誕生

名古屋市は市制100周年を契機として、平成元(1989)年6月30日、「デザイン都市宣言」を行い、同年、名古屋城(中区)、白鳥(熱田区)、名古屋港(港区)の3会場で「世界デザイン博覧会」(7月15日~11月26日)を開催した。松坂屋はこの博覧会にパビリオン「ガウディの城」を出展するとともに、山形博導(ヒロ・ヤマガタ)制作の特別公式ポスターを寄贈した。平成3年3月、「豊かで潤いのある生活文化」を発信する百貨店を目指した松坂屋は、新たに南館を増築。これにより、既存の本館、北館に加えて3館体制となり、売場面積が75,000㎡を越す日本最大級の百貨店となった。



南館・本館・北館の3館体制



南館オープンのパンフレット

●新南館オープン

平成15(2003)年9月下旬、大津通りに面した名古屋店の南館増築が完成し、売場面積32,868㎡の新南館が誕生した。これで本館、北館と合わせた売場面積は計86,758㎡となり、再び日本最大級の百貨店となった。平成18年には、「リビンザ」として開館した北館を33年ぶりに全面改装、「ライフ・リゾート館」としてリフレッシュオープンした。また、平成17年(3月25日~9月25日)、「自然の叡智」をテーマに長久手、瀬戸会場で開催し、目標を大きく上回る2,200万人が来場し、名古屋市を世界都市へと飛躍させた「愛・地球博」(愛知万博)では、松坂屋も公式記念品ショップを運営し、大きな成果を上げた。



新南館



新南館オープンの地下鉄広告

